



Title	記念用プリント・テキスタイルにみられる国民国家の視覚化：1953 年エリザベス二世戴冠式から新生アフリカ国家イメージまで
Author(s)	門田, 園子
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86308
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

記念用プリント・テキスタイルにみられる国民国家の視覚化

1953年エリザベス二世戴冠式から新生アフリカ国家イメージまで

門田 園子 お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所

問題の所在

英国君主エリザベス二世の戴冠式（1953 年）前後の肖像イメージをもとにしたファクトリー・プリント、横浜で製造されていた捺染スカーフは、1950 年代後半、英領西アフリカ植民地を中心に輸出されていた。エリザベス二世のような宗主国君主の肖像イメージを使った commemorative print＝記念用プリント・テキスタイルがなぜ反植民地主義ナショナリズム運動、パン＝アフリカニズムに沸いていた英領西アフリカ植民地に向けて製造、輸出されていたのか。本発表では宗主国の君主イメージが独立前夜のアフリカに拡散した背景を、国民を想像の共同体と表現した政治学者ベネディクト・アンダーソン、民族をナショナリズムの産物とした歴史家アーネスト・ゲルナーの理論、そのほかアフリカの国民国家制度の確立とその視覚化にまつわる論考を踏まえ、独立直前と独立後にもたらされた記念用プリント・テキスタイルとの類似点、相違点の分析から捉え直した。

国民国家の視覚化

近代においては、本来多様であるはずの個人々々を、国家を形作る国民と一律に見なし、まとめるための手段が考えられてきた。その一つに国民国家を視覚化し、国民が共有する共通のイメージを培っていく方法がある。アンダーソンは、国民国家の視覚化には、伝統的な王朝の原理と革新的な国民の原理を統合する傾向があると示している。たとえばそれが歴史家エリック・ホブズボームのいう「創られた」伝統であるにせよ、君主の肖像は

とりわけ、歴史や伝統らしきものと近代的国民国家を結びつけたシンボルとして、国民国家の視覚化に多用されてきた。

英国君主がプリントされた記念用プリント・テキスタイルの最初期の例は、19 世紀初頭のジョージ三世柄である。産業革命が本格化した時期とも重なるため、ジョージ三世柄は広く普及し、その後続く国王・女王の肖像プリントも量産されるようになった。プリントされている人物が君主であることを示すため、王冠、紋章、国旗、国土、国花、戴冠式に用いる宝珠、笏杖の意匠が多用されている。20 世紀に入ると、肖像写真をもとにしたプリントが使われるようになった。

こうした元首やリーダーの肖像がプリントされた記念用プリント・テキスタイルならではの特徴は、アフリカに広く普及したことにある。その理由に、テキスタイルにメッセージ性を込めるアフリカの文化と、記念用プリント・テキスタイルとの相性がよかったことがまず挙げられるが、本発表では英国からアフリカに渡った英国君主柄は、英国と植民地との結束を高める際に利用する媒体となっていたと仮説を立て、論証を試みた。

エリザベス二世の肖像柄プリント・テキスタイル

第二次世界大戦後、英国にとって英領西アフリカ植民地は最重要地域と成り代わったが、英国の関心は United Africa Company (UAC) の活動からも明らかのように、商業的なものであったので、間接的な統治から緩やかな独立という道筋が想定されていた。英国君主に対する崇拝は、間接統治

に欠かせない道具とみなされるようになる。近代以前の君主制は、近代国民国家とは本来矛盾するものであったが、出版物が流通することで、君主のイメージも水平的、世俗的、時空間横断的に普及し、同質的な国民国家にあまねく行き渡ることが可能となった。エリザベス二世の時代には、戴冠式が初めてテレビ中継され、英国から遠く離れた場所にも同時性をもって、女王イメージが拡散することとなる。ゲルナーはメディアが君主制と国民国家を矛盾しない形で結びつけていたことを指摘している。さらに、英国は王族の植民地訪問によって英連邦との結束を固めようとした。エリザベス二世の訪問の軌跡は、ユーサフ・カーシュが1951年に撮影した女王の写真をもとにした記念用プリント・テキスタイルに辿ることができる。

独立前後の記念用プリント・テキスタイル

英国王室柄が主流であった記念用プリント・テキスタイルに変化がみられるのが、1957年のガーナを皮切りとした英領西アフリカ植民地の独立直前の頃からである。英国を表す王冠や国旗とアフリカの国家シンボルである雄鶏、黄、赤、黒、緑のパン＝アフリカニズムの旗が並置され、宗主国と植民地の関係の対等性が示されるようになった。

独立後は英国王室柄に代わって、ガーナ初代首相エンクルマなど新たな為政者の肖像柄が登場する。一方で、国旗、元首の肖像、花など使用される意匠は、英国王室柄に準じていることから、国民国家の視覚化も規格化されていたと考察できる。横浜ではコピーが繰り返される途上で肖像、意匠がやや乖離したものになっていった。当時の日本（横浜）がアフリカに対して持っていたステレオタイプイメージが投影されていたと考えられるが、実証は今後の課題としたい。

さらに、英連邦西アフリカ向けの横浜スカーフのヴァリエーションから、国民国家制度を支える構造そのものも独立後にスライドしていったことがわかる。ゲルナーのいう高文化の確立に欠かせ

なかった教育が、アルファベット文字板、本、コンパス、定規、小学校柄のスカーフに表されたが、これらは、アフリカでの西欧型教育の普及を促進する役割を果たしていた。キリスト教伝道団柄からも現地の人びとへの西欧型教育の導入と帝國的統治を読み取ることができる。統一的国民国家の形成を支える経済、社会的紐帯は、横浜スカーフにプリントされたモダニズム様式の国立銀行、国会議事堂、地方議員会館柄などに表された。

結論

本発表で取り上げた国民国家を視覚化した記念用プリント・テキスタイルが英領西アフリカ植民地で受け入れられたのは、植民地時代に英国の君主制と国民国家制度を組み合わせた公定ナショナリズムが浸透していたこと、アフリカ諸国のほとんどが複数の民族からなる部族的多様性が特徴であったが、独立当初は諸民族を同質化させていく方向が求められたため、英国式の国民国家制度が踏襲されたこと、英国式教育を受けたエリート層が支配者となり、ヨーロッパの高文化とつながりを持ったこと、植民地時代に引かれた国境をそのまま受け継いだことが諸要因にあげられる。

エリザベス二世柄から新生アフリカ国家の表象に至る記念用プリント・テキスタイルは、旧宗主国である英国が用いていた教育や政治、経済などの西欧型近代国家システムを、旧植民地に浸透させる手段となっていた。プリント・テキスタイルのデザインから、近代化、欧米化が進めばアフリカの伝統的部族が解体・消滅し、国民国家という同質的な共同体ができあがるというアフリカ諸国が独立当初信奉したイデオロギーを捉えることができる。1966年以降、英国でデザインされたアフリカ向け横浜スカーフの輸出が途絶えたのが、英連邦西アフリカで相次いだクーデタと軌を一にしているのは、西欧型国民国家制度を視覚化した記念用プリント・テキスタイルがその役割を終えたことの証左である。